

ハワイピジン英語の中の日系文化

篠田 左多江

(平成 22 年 10 月 7 日受理)

Japanese Vocabulary and Culture in Hawaiian Pidgin English

SHINODA, Satae

(Received on October 7, 2010)

キーワード：ピジン英語，日系人，ハワイ，製糖プランテーション，アイデンティティ

Key words : pidgin English, Japanese American, Hawaii, sugar plantation, identity

はじめに

お互いの言語をまったく知らない2つの民族が出会ったとき、どのような方法で意志の疎通をはかるのであろうか。現在のハワイ諸島にヨーロッパ人が初めて到達したときも同じ問題に直面したにちがいない。はじめは身振り言語で切り抜け、次第にお互いの言語を混合して、間に合わせのことばを作り、コミュニケーションを成立させたのである。

ハワイ王国にはおもにイギリス、アメリカ合衆国など英語圏諸国から多くの人びとが来航した。しかし1835年、最初の製糖プランテーションが作られると、労働力としてアジアから移民が導入された。公用語は、ハワイ語と英語であったが、民衆レベルではハワイ語、アジア諸国からの移民の言語が通用していた。人びとは、正式な言語教育を受けないまま、聞き覚えたさまざまな言語の単語だけをつなぎ合わせて、コミュニケーションをはかった。この中には日本語の単語も多く含まれ、世代を超えて伝えられた。

ハワイ社会では現在もなお、さまざまな場面でピジン英語が使われているが、この小論では、現代のピジン英語のなかに、どのような日系文化が残存しているかを検証する。

1. ヨーロッパ人との遭遇

イギリスの探検家で海軍大佐のジェームズ・クック (James A. Cook) は、最初の2度の航海で南半球を探検した。南極を横断し、ニュージーランド、オーストラリア沿岸、太平洋の島々に到達した。ハワイ諸島に到着したのは3度目の航海であった。1776年、合衆国フィラデルフィアで独立宣言が採択された8日後に、リゾリューション号 (The Resolution) とディスカヴァリー号 (The Discovery) の2隻の船で出発した。アフリカからタスマニアへ、クック諸島を経てタヒチへ向かい、北上して、1778年1月18日にカウアイ島ワイメア (Waimea) に停泊した。それは古代にポリネシア人がタヒチからハワイへ移動

したのと同じ航路であった。

このころ、ハワイ諸島には約20万から100万の先住民が居住していたと推定される。住民には、「ロノの神」の伝説¹⁾があり、2隻の見慣れない船の入港は「ロノの神の再来」と信じられて歓迎された。クックはこの地をサンドイッチ諸島と命名した。海軍の中で、とくに彼を擁護してくれたサンドイッチ海軍長官²⁾に因むこの名称は、長い間ハワイ諸島を表すことばとして使われることとなった。

クックは北アメリカ北西部沿岸の探検をすすめたのち、1779年に再びハワイに到着して、島々の地理的調査を実施した。ハワイ島のケアラケクア湾 (Kealahou Bay) に入港したときも「神」として扱われ、食糧、水の他に高貴な人のみ着用できる羽毛のマントを贈られた。クック一行も島の首長にリネンのシャツや鉄製の剣などを贈り、友好的な雰囲気の中に1ヶ月後に出港したが、嵐に遭遇し、船が破損したため、再びハワイ島に戻って錨を下ろすこととなった。このとき「神の船が壊れるのはおかしい」と感じた先住民の態度は一変していた。何とか航海に必要なものを入手して帰国しようとしたが、先住民の盗みをきっかけに両者の関係は悪化し、小競り合いの最中に、クックはケアラケクア湾であっけなく殺害されてしまった。

クックの死後、フランスやスペインの探検家が来たが、その中でもっとも重要な役割を果たしたのは、ジョージ・ヴァンクーヴァー³⁾であった。彼はクックの下士官として1778年および79年にハワイに滞在した。1791年、クックの探検を完成すべく、カウアイ島とハワイ島を訪れてひと冬を過ごした。彼はクックが殺害された経験から、あくまでも平和主義を貫き、諸島内の勢力争いをやめさせるよう尽力した。当時、ハワイ島の首長であったカメハメハの政治顧問となり、王国の統治法や外国人の扱い方をアドバイスした。ヴァンクーヴァーのお陰で、最新の西洋の武器を手に入れたカメハメハは、圧倒的な強さで全島を統一し、ハワイ王国を築いた。こうしたいきさつからカメハメハはヴァンクーヴァーを信頼するようになり、ハワイ王国をイ

ギリスの庇護下においたのである。その後ハワイ王国の政治は、1900年の合衆国への併合まで1世紀にわたってイギリスと合衆国の影響を受けて揺れ動くことになる。

ハワイ諸島は、クックやヴァンクーヴァーの報告により、間もなく欧米諸国に知られるようになった。太平洋上のほぼ中央に位置し、水や燃料、食料の補給に最適の地理的条件を満たすハワイへ欧米人が訪れるようになるのに、時間はかからなかった。当時は合衆国西海岸から中国への毛皮貿易が盛んであり、商船の中継地として最適であった。その後、中国への白檀貿易がはじまり、つぎには捕鯨船の補給地となった。このような状況の下で、先住民のなかには、次の引用のように、欧米船の船員として働く者もあった。

ハワイ先住民と欧米人の出会いを言語の視点からみると、最低限度の必要なコミュニケーションをはかるために、欧米人はハワイ語を、先住民は英語の単語を覚えなければならなかった。1834年から36年にかけてボストンから、当時はメキシコ領であったカリフォルニア沿岸を商船で旅したリチャード・ダナ⁴⁾は、その航海日記*Two Years Before the Mast*のなかで、モンテレイ港におけるハワイ人水夫との会話について次のように書いている。

The only vessel in port with us was a little Lorient. I frequently went on Board her, and became well acquainted with her Sandwich Island crew. One of them speak a little English, and from him I learned a good deal about them.... They appeared talking continuously. In the forecast there was a complete Babel. Their language is extremely guttural, and not pleasant at first, but improves as you hear it more; and it is said to have considerable capacity. They use a good deal of gesticulation, and are exceedingly animated, saying with their might what their tongues find to say. (Dana, Chapter X)

ダナはボストンの古い家柄の出身でありながら、1水夫となった人物で、下層の人びとと分け隔てなく交流し、その様子を記録した。この船には水夫長としてイギリス人も2名乗り組んでおり、会話の基本は英語であった。ハワイ人たちは片言の英語に喉音の多いハワイ語を交え、身振りを最大限に利用して、言いたいことを伝えることができたようである。書物によって言語を習得してきたダナは、初めのうち言葉の混乱に驚くが、次第に陽気で大らかなハワイ人たちと楽しく交流する様子が描かれている。水夫たちの言葉が、まさにピジン英語の始まりであった。

2. 製糖プランテーションの成立と日本人移民

1802年にラナイ島で、中国人 Wong Tse Chun が、ハワイで初めて砂糖を精製したと言われている、しかし事業は失敗に終わり、ウォンは国へ帰ってしまった。その後しばらくして1835年にカウアイ島コロアで、カメハメハⅢ世から借地して、合衆国東部出身の3人が起業したコロア製糖会社は最初の成功した製糖業となった。ハワイの製糖産業が盛んになるのは、1840年代にはいつてからである。ハワイの土地は、王と族長の所有であったが、1848年の「グレート・マヘレ」法によって、50年代から一般の先住民、外国人にも所有が許可された。これにより欧米人が製糖業に投資し、土地を得て大規模プランテーションの建設が可能になった。

土地問題の次に解決しなければならないのは労働力である。ハワイ王国では、合衆国に先駆けて、奴隷制度は廃止⁵⁾されていた。先住民が労働力として期待されたが、ちょうどこのころにカリフォルニアで金鉱が発見され、ゴールドラッシュが始まると、先住民の若者の中には、一攫千金を夢見る人びとの群れに身を投じてアメリカ本土に渡るものもあり、一方で一般の先住民の土地所有が認められたため、自分の所有地でサトウキビを作るものも少数ながら現われた。また、欧米人が持ち込んだ病気が蔓延した結果、多くが命を落とすことになり、先住民人口は激減した。1831年から32年にかけて、13万人あまりの人口が、60年には半分の6万6千人にまで減少した。

プランテーション経営者はこの事態を憂慮して、ハワイ政府に働きかけた。1850年、政府は主従法(The Masters & Servant Act)を成立させ、契約労働を可能にする基礎的な法整備を行った。これにより20歳に達した者は誰でも5年以内の契約労働に従事できるようになり、労働者募集の範囲を外国人にまで拡大することになった。この法には罰則規定があり、契約に違反すれば、収監、罰金などの刑罰を受けることになっていた。以後50年間、この法律のもとに外国人労働者が導入されたのである。ハワイ政府のこのような措置は、欧米からの製糖産業への投資を一気に加速する推進力となった。低賃金で勤勉に働く労働者を求めていた欧米資本家の要求通りになったのである。

労働者として求められたのは、若い独身男子であった。契約を満了すればさらに契約を更新するか、帰国するかのいずれかを選択する、家族を持たない「出稼ぎ」労働者が歓迎された。その条件を満たす者として導入されたのは中国人で、1852年に最初のグループが到着した。しかし中国人は、長い間プランテーションに留まることはなかった。最初の契約期間が終わると町へ行き、小規模な商売を始めるか、独立して小農園を経営した。

一定の期間、定着して勤勉に働く労働者を集めるため、政府は移民局を発足させ、外国からの移民募集、監督、労

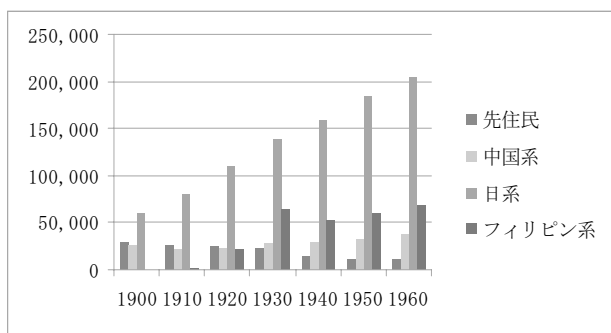
働契約の規制を行った。中国人に続いて、ポリネシア人も導入されたが、実際に来たのはわずかであった。ヨーロッパ移民も検討されたが、移動の距離が長すぎることで、アジア人と比較して高い賃金およびより良い住居環境が必要とされることから、対象からはずされた。そして最後に候補となったのが、日本人であった。

カメハメハV世のもとで外務大臣を務めた W.C.ワイリー (W.C. Wylie) は、日本に滞在していた実業家の友人ユージン・ヴァン・リード (Eugene Van Reed) に労働者の斡旋を依頼した。リードは早速、ハワイへの渡航希望者を集め、幕府にパスポートの発給を求めた。しかし幕府はリードをハワイ王国の正式代表とは認めず、交渉が難航するうちに、大政奉還となって明治政府が発足した。明治政府も幕府と同様の対応であったが、すでに英国船サイオト号 (The Scioto) をチャーターして横浜港に待機させていたため、リードは正式な許可を待たずに153名の日本人を闇に紛れて出港させてしまった。これが最初の日本人移民で、のちに「元年者」と呼ばれた。しかし現地での待遇などについて周知徹底していなかったため、過酷な農園労働に耐えられなくなった労働者たちに日本政府は救援の手を差し伸べ、1871年までに53名が帰国した。

以後しばらくの間、ハワイへの移民は途絶えてしまった。再びこのような失敗を繰り返さないため、まず1871年に「日布修好通商条約」が締結された。81年、第7代国王デイヴィッド・カラカウア (David Kalakaua) は、世界旅行の途中日本に立ち寄り、明治天皇に会見して、日本人移民の送出を要請した。両国政府は慎重に協議を重ね、85年第1回官約移民944名が送られた。移民は農耕経験者に限られ、厳重な審査によって選ばれた人びとで、山口・広島県出身者が多かった。この制度下で94年までに、約2万9千人がハワイへ渡った。

一方、ハワイでは白人の巨大資本による製糖プランテーションがますます盛んになっていった。61年の南北戦争が、南部からの砂糖の運搬を困難にしたこと、76年の「米布互惠条約」により砂糖を無関税で合衆国へ輸出できたことから各島に続々とプランテーションが作られた。

表1 ハワイにおける主なアジア系住民の人口推移 (1900-1960)
The Peopling of Hawaii, pp.186, 188, 190, 194より作成。



1837年に粗糖の生産はわずか2トンであったが、20世紀初頭には世界第3位の生産量を誇るまでになった。

3. 日本人・日系人の言語環境

各島のプランテーションに配置された日本人移民は、言葉や生活習慣の違いによって摩擦が起きるのを防ぐという表向きの理由⁶⁾により、人種別の集団を作って生活した。下の表(2)に示したポルトガル人は、1878年から87年に1万人が、1906年から13年までに1万3千人が入国した。おもにマデイラおよびアゾレス諸島出身の人びとである。彼らは、アジア人以外でもっとも数の多い集団であった。しかし日本人の数が圧倒的に多かったことから、日本語のみを使用して生活できる環境にあった。製糖会社の経営者は英語を話すイギリス人またはアメリカ人であったが、現場監督 (luna) はおもにポルトガル人で、英語は母語ではなかった。当然、経営者は監督に英語で話す。監督はそれを日本人に伝達するとき、聞き覚えた英語に母語であるポルトガル語を混ぜ、さらによく理解できるように日本語の単語を入れた。共通語を持たない人びとがプランテーションを運営する上で、このような間に合わせ言語が不可欠であった。

表2 オノメヤ製糖会社 (ハワイ島) 人種別従業員数 (1895年) 『殖民協会報告』第34号 (1896年2月)

契約労働者 (人)	自由労働者 (人)
日本人 200	400
中国人 0	6
ポルトガル人 30	200
ハワイアン 0	65

1900年、ハワイ王国は合衆国に併合され、アメリカの法律が適用されたため、官約移民、私約移民と続いた契約労働は禁止された。以後は自由移民として自費で渡航し、自由な労働が可能になったため、多彩な経歴をもつ日本人が渡航するようになった。都市部に住んで労働しながら勉学するスクールボーイと呼ばれた苦学生も増加して、日本人移民のなかの新しい波となった。自由移民の出現とともに、プランテーションを離れ、都市部に住む日本人も増加した。オアフ島ホノルル、ハワイ島ヒロはそれぞれ多くの日系人口を有する都市になって、農業労働とは異なる仕事に就く者も増えた。

しかし都市部においても日本人は集中して住み、日本人町の中ではすべて日本語で生活した。また、他人種との交渉でも、最低限の単語さえ知っていれば不便を感じなかった。つまりプランテーション内部および都市部の両方に閉鎖的な日本人コミュニティが形成されたのである。日本語メディアも充実し、『やまと』、『ハワイ殖民新聞』、『日布時事』、『布哇報知』(のちに『ハワイ報知』)などの日刊紙

が創刊され、各島にも複数の新聞があった。英字新聞に掲載された主なニュースは翻訳されて、日本語新聞に載った。興亡は激しかったが、文芸雑誌から家庭雑誌、実業雑誌など多くの雑誌も発行された。また、本土に比べれば日本と距離的に近かったため、日本の雑誌、書籍も容易に入手できた。このような環境から、英語が読めなくてもあらゆる種類の情報を手に入れることができたのである。

1924年排日移民法によって日本からの移民が禁止されると、これまで心のどこかで出稼ぎの気分が抜けなかった日本人も、いよいよハワイに定住する決心を固めることとなった。1910年代から「写真花嫁」として渡ってきた女性たちと結婚して家庭をもっていた人びとが直面したのは、二世教育であった。

二世は当然、公立学校へ通って英語による合衆国の教育を受けた。プランテーションでも都市部でも日本人コミュニティの近くの学校であれば、日本人子弟が多くを占めており、言語環境もあまり変化がなかった。先住民、フィリピン人、中国人などとともに学んだ子供たちは、同様にピジン英語を使ってコミュニケーションをはかった。子供たちは生まれた時から家族が話すピジン英語（またはピジン日本語）に慣れ、異なる言語・文化的背景をもつ子供たちとの交流にもピジンを使った。そして子供たちが成長したとき、ピジンが支配的になり、次世代へも伝えられていった。ミルトン・ムラヤマ⁷⁾の小説 *All I Asking for is My Body* の主人公、二世の Kiyoshi は次のように述べている。

…we spoke four languages: good English in school, pidgin English among ourselves, good or pidgin Japanese to our parents and the other old folks,….(Murayama, p.5)

このなかで good Japanese というのは標準日本語ではなく、ハワイ移民の多数を占めていた広島、山口、熊本のいずれかの方言であった。

1920年代のプランテーションを描いた川路浩一の短編小説「ある夜」(『布哇報知』1/25/1923)では、父に上着を買ってほしいとねだって断られた息子が「いつもいつも同じものばかり着るんはミー・ノー・ライキぞ」と言っている。“I don't like”をIではなく me を、助動詞は使わず no で代用し、like を「ライキ」と発音するのが一般的だった。

1935年に書かれた山杉一郎の短編小説「鳳梨畑風景」(『日布時事』11/08/1935)の中で、急病人が出たときに人びとは「オスマラ モーベタ ドクター ハッピー」と叫んで、監督に急を知らせたと書かれている。これはパイナップルが導入された⁸⁾後の日系人を描いているが、30

年代になってもまだ、農業従事者はこのような言葉を使っていたことが分かる。オスマラは What's the matter, モーベタは more better で much better の誤用、ドクターは doctor で、ここまでは英語、ハッピー (hapai) はハワイ語で「運ぶ」を意味する。つまり「どうしたんだい、医者を呼んだほうがいい」と言ったのである。

表(3)は英語を話せない人の割合を示しているが、これはすべての人種を対象としているため、日本人に当てはめるのは不適當かもしれないが、概要だけは知ることができる。20世紀初頭には半数以上の人びとが英語を話せなかったが、英語教育の普及もあり、30年代にはその数が4分の1まで減少している。日本人の場合は、日本語のみを使用しても十分生活できる環境にあったため、英語を話せない人はもっと多かったと推測される。

表3 10歳以上の全人口中英語を話せない人の割合

Schmitt, Robert C: *Demographic Statistics of Hawaii: 1778-1965* (Honolulu, Univ. of Hawaii Press, 1968)

年	人口	英語を話せない人	割合 %
1900	127,768	68,017	53.2
1910	148,789	84,177	56.6
1920	187,167	69,493	37.1
1930	273,037	66,822	24.5

第2次大戦中、ハワイでは日系人人口があまりにも多かったため、経済の停滞が懸念されることや輸送船の不足から、合衆国本土のような強制収容は実施されなかった。多くの若者が志願兵として従軍したが、本土出身者と合流して第442連隊戦闘部隊が編成されたとき、お互いに話が通じなかったと言う。そして今となっては笑い話として語られる多くのエピソードがある。

元ハワイ大学教授のカオル・ノダ⁹⁾は志願兵となったが、本土から来た兵士とは言葉が通じなかった。「灯りを消せ」と言うつもりで “Pio the light” と叫んだが、‘pio’ は、off を意味するハワイ語なので本土の兵士には分らなかった。戦後になって日本から来た人びとも日本語がうまく通じなかったので、自分の言葉は両親が使っていた広島方言であると気づいたと言う。

ピジン英語は次第にクレオール化して、最終的にハワイ生まれの人びとの母語となっていくた。

ギャレット・ホンゴウ¹⁰⁾は本土に住んでいたが、久しぶりに生まれ故郷のハワイ島ヴォルケーノの町に家族とともに戻ってきたとき、日系二世の郵便局員が懐かしがって、「お父さんそっくりになったねえ」(“Your face dah same as your faddah's, ass why,”) ¹¹⁾と話しかけてきた。久しぶりに聞くピジン英語であった。彼は、“Oh, yeah,”と応じ、I answered, slipping into pidgin myself…と、自分も思わずピジン英語を話そうとしていることに気づく。(Hongo, p.48-49) つまり彼がハワイ生まれだというアイ

デンティティを確実なものにするのがピジンなのである。

4. ハワイピジン英語の中の日本語

Kent Sakoda, Jeff Siegel は、ピジン英語の中に含まれている言語を分析し、*Pidgin Grammar* の中で単語を列挙している。その中で英語関連の単語が32で最も多い。そのうちわけは、alphabet, shame など英語そのもので意味も変わらない単語が9, brother を brah とする変形英語が11, 英語を使っているが、英語にはありえない意味をもつ単語が12で、たとえば「鳥肌」をそのまま英語で chicken skin とし、日本語の「鳥肌がたつ」と同じ意味で使用する。つまり英語を並べていても意味はまったく異なる造語である。そのほか、ハワイ語が25で英語に次いで多く、日本語15, ポルトガル語9となっている。

ではどのような日本語・日系文化が含まれているのだろうか。現代のピジン英語の中には、150年近く生き続けた日本語が残っている。それらを小説および1980年代以降発行され続けているピジンの単語集から抽出する。単語のみを検討し、stay, wen を多用する、語順が変わるなどの構造は論じない。引用にはミルトン・ムラヤマのプランテーション3部作の一つ、*Plantation Boy* および最新のピジン単語集 *Da Kine Dictionary, Pidgin to Da Max*, ハワイ出身の歴史学者ロナルド・タカキの著書 *Strangers from a Different Shore* を使用したが、卑猥なものは除外した。

① 日本的価値観を示す語

bachī That's his bachī for showing off! He creates his own bad luck! (Murayama, p.142)

「自慢するからバチが当たったんだよ。自業自得さ」という意味で、「バチ」はもちろん、現代の日本ではあまり使われなくなった「罰が当たる」という表現に由来する。日系人は日本の価値観を保持しており、それを親から子へと伝えてきた。少なくとも二世までは、「そんなことをすると罰が当たりますよ」と言われて育った。それが同じ意味のまま現代に伝えられている。

bakatare Da bakatare boy wen play wit matches and burn down his house. (Tonouchi, p.8)

この言葉も、子育て中に親が子に「馬鹿たれ」と言って叱ったことから、現代まで受け継がれてきたのであろう。「～たれ」をつけるのは、東日本ではあまり一般的ではない。むしろ関西以西の言い回しと思われる。火遊びをして火事になり、家を焼いてしまったという事故はどこでも聞く話である。wen をつけると過去形になる。da=the, wit=with で、th が正しく発音されない。

gaman They gaman too much. (Murayama, p.35)

この言葉は現代の若者から忘れられているかもしれないが、移民として渡った一世は、ひたすら「我慢」をしてつらい労働に明け暮れた生活を送った。彼らは子である二世に「我慢」は美德であると教え込んだ。従って二世もその価値観を受け継いでいる。二世と話すと、我慢という言葉がよく聞かれる。例文では gaman を動詞として使っているが、名詞になる場合もある。

shibai HI 5, az all big shibai dat. Dey ony like take owa money. (Tonouchi, p.82)

「ハワイの5大財閥なんて大芝居を打って(私たちを騙し)、私たちからお金を巻き上げるのが好きなんだ」という意味である。「シバイ」というのは演劇ではなく、嘘をついて人を騙すという意味が含まれている。日本語でも「彼女が泣いたのは芝居だ」のように使われる。

uji Sorry, I no give out my phone number to ujin kine guys. (Tonouchi, p.92)

「私はウジみたいなヤツに電話番号なんか教えないわ」と言っている。ウジは忌み嫌われるものを表象している。この例文では形容詞的に使われている。

② 食物

bento Whean da boy ordered da bento? (Simonson)
「弁当を注文した男の子はどこ？」と販売員の言葉である。プランテーション労働者が、毎日弁当をもって通ったことから、ハワイ社会では弁当という食事の形態が一般的で、欧米とはまったく異なった食文化を形成している。

buta I going in one buta hunt wit my cousin dem. (Tonouchi, p.13)

buta hunt は野豚狩りで、プランテーションの日系人は干し肉にして蛋白源とした。pig ではなく、buta という日本語がそのまま使われている。ハワイでは肉を指すときも、pork ではなく pig と言う。普通に食べる豚の蒸し焼きは、kalua pig と呼ばれている。

manju Wen come time for chip in, the manju bugga only wen give two bits. (Tonouchi, p.61)

マンジュウは食物であるが、この場合は stingy の意味で使われている。「お金を出すときになって、たったの2ドルしか出さなかった」というのは、たぶんチップ(tip)を指すのであろう。なぜマンジュウが「ケチ」の意味になったのかは不明である。プランテーション生活は基本的に自給自足であったから、ハレの日には饅頭を作ってふるまった。現在でも年配の日系二世が、ポットラックディナーに饅頭を持ってくることがある。スーパーストアでも売られ

ているので、現在ではローカルフードになっている。

musubi, sashimi, sushi, shoyu, mochi, nori
(Simonson, Tonouchi p.84, Sakoda)

とくに例文はなく、言葉だけを解説している。おむすびは日系移民の常食。一世から次世代へと受け継がれ、現在では人種に関わりなく、ハワイのローカルフードとして定着している。梅干しだけでは物足りないので、ランチョンミートを乗せ、のりで巻いた「スパムむすび」が一般的である。中身は何であっても、ノリはおむすびには欠かせないものである。広島地方では、「おむすび」と言い慣わしている。その影響で「おにぎり」と言わないのが特徴である。ハワイ先住民には魚を生で食べる習慣があったので、日本人移民がもたらした刺身はあまり抵抗なく受け入れられた。プランテーションでハレの日のご馳走であった寿司は、日本の農村で作られていた稲荷寿司および巻き寿司で、江戸前の握り寿司ではなかった。生魚を乗せた握り寿司が一般的になったのは、1990年代以降である。醤油は、日本人には欠かせない調味料としてプランテーションで手作りされた。モチも同様で、現在でも「もちつき」は正月だけでなく、各種パーティでも行われる。また、餅を使ったさまざまなお菓子もスーパーストアで売られている。

tako Hey, da kine tako ono, you know. (Takaki, p.3)

カリフォルニア大学バークレイ校教授であったロナルド・タカキがハワイで過ごした子供時代を回顧して書いたもの。「このタコはおいしいね」という意味で、ono はハワイ語でdeliciousの意味である。da kine は多用される便利なことばで、「あれ」とか「それ」などのような指示語、あるいは「～ のようなもの」を意味する。

ume Some people eat 'em but I tink da ume only fo' one ting, decoration! (Tonouchi, p.92)

これを話している人は梅干しが嫌いなのであろう。だから「飾りにすればいいわ」と言っている。梅干しは欧米人には好まれないが、ハワイは別である。果物や野菜の種を乾燥して味付けた crack seed という中国系の食物があり、専門店には100種類もの種が並んでいる。この中に「リヒン・ムイ」(Lihing Mui) という梅干しよりももっと強い塩味をつけた乾燥梅がある。子供たちもおやつに食べることから、梅干しも受け入れられたと考えられる。

③衣服

boroboro Brah, your cloths so boroboro make A fo' go out wit you. (Tonouchi, p.11)

「お前の着てるものがあんまりボロなんで、一緒に行くの

が恥ずかしいよ」という意味で、make A は for make shame の意味である。これは形容詞であるが、boroboros と名詞につかうこともある。

zoris Wow Dextah, yo' zoris went through da war o' wot? Get air-conditioning undaneath!

(Simonson)

「戦場へでも行ったのかい、君のゾーリの裏が穴だらけで空気がよく通るよ」と言っている。zoris と複数にして使う。暑いハワイでは、老若男女を問わず、靴よりもゾーリを愛好する。

④日常生活ほか

benjo Now I gotta go benjo real bad.(Tonouchi, p.9)

「今すぐお手洗いにいきたい」という意味だが、日系人だけでなく誰でも「ベンジョ」という言葉を使う。筆者の経験では、長い道のりをドライブしていたとき、二世の男性が、お手洗い休憩を benjo stop と言ったので驚いたことがある。

bobura (Simonson)

かぼちゃを表す中国・九州地方の方言で、中が黄色いことから「黄色人種」、「日本から来た日本人」を意味する。これと対照的に、「バナナ」があり、これは「外見は黄色人種だが、中身は白人」を意味する。両方とも侮蔑の意味が含まれている。

bocha I going bocha now. (Tonouchi, p.10)

「さあ、これからお風呂にはいるよ」という意味。たぶん「ボチャ」は擬音で、幼児言葉だったのかもしれない。新潟方言ではお風呂を「ぼちゃ」というので、この地方からの移民が言い出して、take a bath よりも簡単なので広まったのであろうか。

ichiban Wen comes to cooking, Ichiban Saimin is ichiban numbah one.

「イチバン サイミン」は商品名で、サイミンは日本の中華そばハワイ版とでも言えそうな麺のローカルフードである。number one を「イチバン」と日本語で言う。

mosh,mosh Mosh, mosh, Christy speaking.

(Tonouchi, p.62)

日本人が電話をかけるときの「もし、もし」である。英語の影響を受けて、i が脱落している。

obake She told da obake story. (Tonouchi, p.68)

「お化け」と言っても、妖怪の類ではなく、「ウラメシヤー」

と出てくる古典的な女性の幽霊のことである。日本人移民がもたらした幽霊のイメージが定着したと思われる。

sukoshi Karen is sukoshi kine forgettable, az why she cannot find her keys. (Tonouchi, p.84)
「カレンは少し忘れっぽいよ。だって鍵が見つからないんだもの」と言っている。日本人が「少し」を多用することからこのような表現が残ったのである。

taran He nevah know da kine simple stuffs. He sukoshi taran. (Tonouchi, p.87)
「彼はそんな簡単なことも知らないんだ。少し頭が悪いんだよ」と言う意味であるが、前出の「スコシ」と「タラン」を組み合わせている。「タラン」は足りないという日本語の広島地方の方言である。

おわりに

ハワイのピジン英語は、製糖プランテーション抜きには論じられない。とくにその中に含まれる日本語は、プランテーション生活で人びとが言い慣わしてきた言語とその価値観が、長い間受け継がれて、一般社会でも使われるようになった。「バチ」や「ガマン」などの日本人が大切にしてきた価値観は、現在日系6世まで育っているハワイ社会にも伝えられている。

ピジンは世界中のさまざまな場所で、異言語・異文化が出会ったときに、意志の疎通をはかる間に合わせの手段として機能してきた。日本でも幕末に鎖国が解かれて、外国人が流入したときに、「横浜ピジン」が生まれた。しかしそれは時の経過とともに消えていった。ハワイでは、クレオール化して現代でも、友達、家族などの間で気軽に話すときに使われている。

しかし教育の場では、「クズのことば」として長いこと撲滅が叫ばれてきた。1987年に州の教育委員会は、学校教育現場でのピジン使用禁止、標準英語のみ使用する方針を発表し、標準英語のさらなる普及につとめようとした。ところが思いがけない反発が各所で起こった。まず、現場の教師たち、ハワイ大学マノア校の言語専門家などが反対した。ピジンは今や、「クズ」ではなく、ハワイ生まれ、ハワイ育ちのアイデンティティを示す重要な言語であると主張したのである。

1990年代から2000年にかけて多くのピジンに関する書籍が出版された。それらは単語を集めた辞書の形式から体系的に文形、用法などを論じる文法書まであり、一部は本稿にも引用した。

小説などでも積極的にピジンの表現を使う作家が現われた。1960年代に書かれたカズオ・ミヤモトの *Hawaii End of the Rainbow*¹²⁾ は、プランテーションにおける日本人

移民を描いたにもかかわらず、文中の会話はすべて標準英語で表わされており、プランテーションの実情を知る者には違和感がある。ピジンを使用すれば、もっとリアルな描写ができるということで、ミルトン・ムラヤマをはじめ、『バンブーリッジ』¹³⁾ に所属する作家たちも、作品にピジンを取り入れていった。ヒロの公共交通機関のバスは、Hele On (move) というピジン英語の名称で親しまれている。ハワイのアイデンティティを示すために敢えて、自治体がピジンを採用した例である。

作家のルイス・アン・ヤマナカ¹⁴⁾ は次のように述べた。

Every time we close the door on pidgin, we close the door on culture. (*Rafu Shimpō*, 11/29/99)

ピジンはハワイの人びとのアイデンティティの証明としてこれからも新しい言葉を受け入れながら継承されていくと思われる。

註

- 1) さつまいもの神で農耕の神とされる。大きなカヌーで先祖の国カヒキに船出し、作物や家畜を満載して戻ってくることを約束した。ハワイの人びとはマカヒキの祭りを催して、毎年ロノの神の帰りを待つ。クック一行はロノ神が帰り、豊穡をもたらすと誤解された。
- 2) Earl of Sandwich 1718-1792 17世紀から続くイングランドの爵位継承者で、本稿で扱われるのは第4代の伯爵である。海軍大佐、政治家となり、ジェイムズ・クックに探検のための資金を調達した。
- 3) George Vancouver 1757-98 イギリスの海軍中尉。クックの第2、第3航海に同行した。のちにアメリカ大陸北西部の太平洋沿岸(現在のカナダブリティッシュ・コロンビア州、合衆国アラスカ、ワシントン、オレゴンの各州)を探検し、カナダのヴァンクーヴァーは彼の名をとって命名された。
- 4) Richard Henry Dana 1815-1882 合衆国マサチューセッツ生まれ。ハーバード大学で学ぶが、幼いころにかかったハンカの影響で弱視となり、思うところあって牛革を運搬する商船の水夫となり、2年間、カリフォルニア沿岸をまわる。帰国後、ハーバード大学法学部を卒業、見聞した水夫の地位の低さを是正する基本法を整備。奴隷制度廃止論者として活動。政治にかかわり、ローマで客死。
- 5) カメハメハⅢ世の治世のとき、合衆国憲法を手本にした1852年憲法が公布され、そのなかで奴隷制度廃止が明記された。合衆国より13年早い。
- 6) 実際はすべての労働者が人種を越えて団結して、待遇改善を要求してストライキなどを行うのを防ぐため

はなかったかと考えられている。

- 7) Milton Murayama マウイ島ラハイナ生まれ、ブウコリイ・プランテーションで育つ。ラハイナ・ハイスクール卒業。第2次大戦に情報兵として従軍。戦後、ハワイ大学でBA、コロンビア大学で中国語・日本語専攻のMAを取得。積極的にピジンを取り入れて、プランテーション生活を描いた作品を発表。
- 8) パイナップルの導入はさとうきびよりもずっと遅い。1901年、James Dole が Hawaiian Pineapple Company を創業、1922年にはラナイ島がパイナップルの島となった。1940年には世界生産量の80%を占めるまでに成長。1990年代に大部分のパイナップル農園は、安いアジアの産物との競争に敗れて閉鎖された。
- 9) Kaoru Noda 1928年、広島県出身の両親のもと、ヒロ生まれ。ヒロ・ハイスクールおよび本願寺日本語学校中等部卒業。志願兵として北イタリア戦線で戦う。除隊後、G I ビル(奨学金)によりハワイ大学および本土の大学で学び、ハワイ大学ヒロ校教授。インタビューは2004年9月6日、ヒロの自宅にて。
- 10) ギャレット・ホンゴウ ハワイ島ヴォルケーノの町に生まれる。ミシガン大学に学び、カリフォルニア大学アーヴァイン校でMAを取得。オレゴン大学英文学科教授。詩人。
- 11) ass why=That's the reason.
- 12) Miyamoto, Kazuo: *Hawaii End of the Rainbow*, Rutland & Tokyo, Charles Tuttle Co., 1964.
- 13) *Bamboo Ridge*, 1978年にエリック・チョック(Eric Chock), ダレル・ラム(Darrel H.Y. Lum)らが創刊したハワイの作家の作品を集めた定期刊行物。ハワイの多様な文化環境のもとでローカルの文学・文化を育てるのに大きな役割を果たしている。後述のヤマナカは同人。
- 14) Lois-Ann Yamanaka, 1961年モロカイ島パハラ・プランテーション生まれの日系3世の作家。ハワイ生まれのアイデンティティを示すため、積極的にピジン英語を使って創作している。1993年、詩集 *Saturday Night at the Pahala Theater* でデビュー、その後も多くの人種やローカル社会を描く小説を発表している。

引用文献

- Dana, Richard Henry: *Two Years Before the Mast*, 1840
- Murayama, Milton: *All I Asking for is My Body*, San Francisco, Supa Press, 1975.
- Plantation Boy*, Honolulu, Univ. of Hawaii Press, 1998.
- Simonson, Douglas: *Pidgin To Da Max*, Honolulu, Bess Press, 1981.
- Nordyke, Eleanor C.: *The Peopling of Hawaii*, Honolulu, University of Hawaii Press, 1989.
- Hongo, Garette: *Volcano, A Memoir of Hawaii*, New York, Alfred A. Knopf, 1995.
- Tonouchi, Lee A.: *Da Kine Dictionary*, Honolulu, Bess Press, 2005.
- (この本にはページナンバーがっていないので、引用文献のページを表示できない)
- 『日布時事』, ホノルル, 日刊紙
- 『布哇報知』, ホノルル, 日刊紙
- 『羅府新報』, ロス・アンジェルス, 日刊紙

参考文献

- Hanzawa, Dorothy Ochii, Komeiji, Jane Okamoto: *Okage Sama De: The Japanese in Hawaii*, Honolulu, Bess Press, 1986.
- 後藤 明, 『ハワイ・南太平洋の神話』, 中公新書, 1997年
- Dorrance, William Henry: *Sugar Island: the 165-Years Story of Sugar in Hawaii*, Honolulu, Mutual Publishing, 2000.
- Sakoda, Kent & Siegel, Jeff: *Pidgin Grammar*, Honolulu, Bess Press, 2003.

Summary

In 1778, Captain James Cook and his crew visited the Hawaiian Islands. This is the first contact of Hawaiian people with the Europeans. After that more and more people came from Europe and the USA, and Hawaii became a stopover in the fur trade, the sandalwood trade and whaling. People used make-shift language mixing the English and the Hawaiian words as a way of communications.

In 1835, the first successful sugar plantation was established in Kauai. Gradually the sugar industry became the most important in Hawaii. Plantation laborers were imported from China, Portugal, and Japan. In the 20th century, Filipinos and Koreans arrived. Most of the plantation owners were Americans. A new form of language, pidgin English, started to be used for communication among these owners and laborers.

Such laborers went out of the plantation to live in the nearby town. They had family and children attending public school who learned Hawaiian pidgin English from their classmates. As they grew older, they spoke pidgin more than their mother tongue. In this way, pidgin became their primary language and a symbol of the Hawaiian local culture.

Hawaiian pidgin has many Japanese words, because the largest ethnic group in Hawaii is people of Japanese ancestry. Among these words are 'bachi' (punishment) or 'musubi' (rice ball), which is Hiroshima and Yamaguchi dialect. These words have lived for more than a century, passing on Japanese culture and customs to later generations.